ビルマ最前線〔1〕

宮部一三

著者　宮部一三

昭和9年1月教育歩兵19連隊(金沢第9師団)に入隊。南京攻略，徐州会戦，武漢攻略戦に参加。昭和17年少尉候補者試験に合格（少候23期)。昭和18年教育119連隊第3大隊副官としてビルマの戦場に——。タレ高地で右半身負傷。ピンウエ，メータテーラ等の最前線にあって死闘。終戦時，軍旗奉焼に立会い収容所内では師団長専属副官。密かにトイレットペーパーに記録して持ち帰る。昭和51年ビルマ慰霊団長として古戦場を巡る。

現住所　岐阜県揖斐郡池田町池野

ビルマ最前線　1　　定価 1,500円

昭和55年7月10日　第1刷
昭和56年2月20日　第4刷

著　者　宮部一三 ©
発行者　伊藤太文
発行所　叢文社

〒101 東京都千代田区猿楽町1-4-5 久松ビル
電話 03-295-0159　　振替 東京 9-42714

0093—801527—4224

㈱東京美術印刷社／小高製本工業

宮部一三

ビルマ最前線

〔1〕

叢文社

目次

臨時動員下令 7
卒業即決戦場　鬼教官の目に涙……7
妻の写真……10
寒中琵琶湖に飛び込む……12
輸送船三池丸……16
マラッカ海峡戡定作戦 20
楽土昭南島　マライは第三線なり……20
友人粟野……22
マラッカ進駐……23
辻本少尉の自決……26
奇襲上陸……28
兵站旅館南明閣……32
ビルマの決戦場へ 35
ジャワの極楽、ビルマの地獄……35
ウインゲート空挺部隊の降下……39
人柱の上に築かれた泰緬鉄道……42
ビルマの古都マンダレー……49
三途の渡し、メザの渡河点を渡る……50

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

敵機、患者列車を襲う……53
安兵団緒戦の死闘 56
ウインゲート空挺部隊の撃破、ミットキーナ救援……56
サーモ付近の苦闘―弾薬、糧秣の補給も絶えて―……59
日の丸陣地の交戦……61
三叉路陣地潰滅……64
インヂゴン附近の戦闘 71
前進陣地全滅……71
マスミ、マナミの私設野戦倉庫……74
カーサ飛行場の確保……77
ピンウエ密林の死闘―軍旗を死守せよ― 80
初日に誓う……86
軍司令官の感状に輝く悲運の野中大隊 89
苦悩の助っ人部隊（上原太之氏特別寄稿） 95
戦友すべて死す（古川光男氏特別寄稿） 101
あゝクレ高地 106
イラワジの流れ尽きるとも、この恨みとこしえに……106
第一回強襲……108
第二回奇襲……109

第三回強襲……111
浅野連隊長、野中大隊長戦死……114
白衣三旬……116
クレ高地野砲中隊の死闘（上村博氏特別寄稿）……120
メイクテーラ附近の会戦……165
敵機の乱舞、咆哮する戦車砲……165
痛恨のメイクテーラ（小林中尉手記）……170
メイクテーラの脱出（看護婦　高群トリ氏手記）……176
英魂未だ死せず、遂に御遺骨発見……179
ケイガン附近の激戦……187
第九中隊全滅、蜂蜜で別れの盃……187
転進百里　ビルマ反乱軍と格闘……190
空から投降勧告文……196
国家の為……197
英兵から日本兵へ……198
アンダマン諸島方面、全日本軍将校兵に告ぐ……199
無　敵……200
戦友に寄する書……201
兵、楯、壮、兵団の将兵諸君に告ぐ……203

策集団転進掩護作戦 204
無条件降伏勅命下る 212
軍旗奉焼……215
武装解除、ビルマ人の温情に泣く……219
汗と涙の収容所 223
いじらしい贈物……225
屈辱と血涙の英軍作業……226
収容所の内で慰霊祭……230
ドラム缶事件……231
連合軍司令部『世界時報』を発行……232
夜の演芸大会……235
コカイン文苑の発刊……236
日本からの便り……240
戦犯容疑部隊の指定　摘発と首実験……244
収容所長印度人大尉の好意……246
復員船抵津丸……248
私はビルマに残りたい……249
聞け、絞首台上の血の叫び〈戦犯獄中遺文集〉 251
あとがき 278

臨時動員下令

卒業即決戦場　鬼教官の目に涙

昭和十八年十一月十五日、座間の相武台陸軍士官学校大講堂において御名代の朝香宮鳩彦王殿下の御台臨を仰ぎ、私たち少尉候補者第二十三期六百余名の晴の卒業式が行なわれ、牛島満学校長（後に沖縄方面軍司令官として自決）から卒業証書を渡された。

僅か一カ年たらずの短い期間ではあったが、下級指揮官としての必要な戦術、実兵指揮を学び朝は六時起床、夜は十一時就寝。文字通り月月火水木金金の猛訓練であった。卒業証書を手に新任務につく学生を校門に並んで見送る中隊長教官区隊長の目には涙が光っていた。

日頃は鬼教官として私たちをきびしく教育したこの教官達も、戦局日増しに悪化して玉砕の悲報相次いで伝えられた当時である。今この校門を出て行く教え子も、日ならずして玉砕の運命の待つ決戦場におもむくと知っては、涙なしには送れなかったのである。私は原隊復帰を命ぜられ敦賀歩兵第百十九連隊、通称号「中部第三十六部隊」に帰任した。十六日、中隊教練の査閲中であった公文名演習場において浅野連隊長に申告、辻少佐、宮内少佐等の連隊幹部に挨

拶した。皆んな喜んで「宮部が帰った」と歓迎を受け、母隊の有り難さをしみじみと感じた。

翌十七日久し振りの初出勤である。私が少尉候補生受験準備の時から特別の指導を受けた朝日瑩中尉が浅野連隊長に懇望した結果、初年兵教育教官要員として第十中隊付を命ぜられる。在校中夏休みの宿題で「初年兵教育計画案」を作成したが、これが早速役に立つと内心喜んでいた。

しかし、二、三日して朝日中隊長が私を隊長室に呼び、「宮部、せっかく中隊にきてもらったが臨時動員が下令され、（十一月十九日）戦時命課で第三大隊副官で転出することになった。同じ大隊だからお互いに頑張ろう」と告げられた。

十二月一日を動員第一日として私は第三大隊本部編成委員として、人員、兵器、被服の受領、動員会報の出席と、毎日が目の廻るいそがしさであった。

旧第二大隊本部の事務室に三個大隊本部の編成事務室を置いてあったから、その狭苦しさは一通りではなかった。

五、六日過ぎて、私の乗馬『鳴勇』が到着した。体操と乗馬は私の不得意な科目であったが、それでも家との往復は愛馬の背で退出勤、妻は朝晩好物の人参を与えるのを忘れなかった。

大隊長は辻村正大尉である。長く中隊長として中国に勤務せられ大隊長学生として満州公主嶺学校を卒業、私の卒業帰隊二日前に着任された。

十三日編成を完結した連隊は、十五日兵営出発、饗庭野廠舎に転営することになった。

この日、私の晴れの出陣を見送るため、大阪より妻の父、岐阜の両兄が前日から敦賀に来て家財道具の整理を手伝った。十四日、最後の夢を我が家に結んで、明くれば十五日、五時に起床して新しい軍装を身にまとい家主の柴田のお伯母の心尽しの赤飯に家族と共に出陣を祝い、愛馬『鳴勇』に迎えられて連隊へ急いだ。

七時連隊出発。行軍にて饗庭野に向う。営門前の沿道には出征する我が子、我が夫を見送る人で混雑を極めていた。旧友加藤氏の家の軒で日の丸の旗を振って激励する私の両兄、父、妻、加藤氏夫人。

「御元気で後の事は御心配なく」

妻の言葉がいつまでも耳に残った。

ただ残念なことは亡き両親のことだった。健在ならば今日のこの馬上の勇姿を、一目見てもらえたものを——。どんなにか喜んでくれたことだろう。貧農の豚児として育ち、今、国軍将校の一員として晴れの出陣を迎える日を——。

軍籍に身を置いてこの営門をくぐって満州派遣、上海南京攻略戦等に出陣すること三度、こんどこそ生きて再びこの営門をくぐることはないであろう。敦賀の兵営よ、野坂山よ、敦賀湾よさらば。十五日夕、饗庭野に到着、大隊は第二号廠舎に入る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

妻の写真

転営前の十二月十三日、動員会報を終って、夜遅く家に帰った。妻はいつもの様に愛馬『鳴勇』に与える人参を片手に玄関に迎えた。

愈々編成を完結した連隊が、十五日屯営を出発、饗庭野廠舎に転営することになって、夕食後将校行季の整理にとりかかった妻は、自分の机の上にいつも飾ってあった愛用の「白熊」の縫いぐるみを入れ、最後に

「この二枚だけは是非持って行って下さい」

と大阪の生駒山に遊んだ時、兄に写してもらった名刺大の写真を二枚、行季の中に入れようとした。私はそれをさえぎって

「いやしくも軍人が戦場に臨めば生きて再び帰ることはできない。戦場に名誉の戦死をした時、女の写真、妻の写真を持っておったと云われては男の恥だ。お前の気持はよく判るがそれだけは持って行けない。」

とキッパリ断った。

妻は淋しそうにしてその写真を片付けておった。

やがてシンガポールに上陸して将校行李を開けると『戦術教程』の中から例の写真が出て来た。

どうしようか、捨てようか、焼こうか、破ろうか、けれども妻のやさしい心を思う時、私の胸の中は言い知れぬ感情がかけめぐった。結局写真はそのまま携帯した。

北緬の戦況急を告げてビルマに急進した連隊は「マンダレー」において約二カ月の作成期間を予想して戦場に必要なもののみ携行することにより、将校行李も残置荷物とした。その時例の写真をそっと抜き取って紙入れに入れた。私はまたも「軍人の恥、男の恥」が頭をかすめたが、すぐまた「死なば諸共、一身同体」と、それを思い直した。

そうしてあの北ビルマの苦戦、ピンウエ附近の玉砕陣地の占領、クレ高地の夜襲戦、どんな時にもどんな場所にも私の左の物入れには妻の写真が入っていた。将校行李も焼け、装具は破れ、ほんとうに裸一貫になってしまったが、汗によごれ、雨に色あせた小さな二枚の写真だけは離さなかった。そうして敗戦無条件降伏、収容所の片隅で人目をしのんでそっと出して見る妻の写真は黄色く薄ぼけて顔の形も見えない位だが、着物や帯の模様、いや、頭の髪の毛の一本一本までがはっきりと私には分かるのであった。

かつて南京城の攻略を終って当時上海派遣軍司令部のあった湯水鎮附近の残敵掃蕩作戦をやった時、山の中で捕えた敵の高等司令部の書記であると云う曹長を調べると、物入れの中からきれいな妻と可愛い子供の写真が一枚出て来た。当時独身であった私は何んだ女々しいと笑っ

ていたが、十年後に始めてその時の中国軍下士官の心情が分かる様な気がした。

寒中琵琶湖に飛び込む

饗庭野廠舎に到着してからは、密林内の戦闘、上陸戦闘、実弾射撃、対空対潜監視教育、海没防止訓練等、連日の猛訓練が続けられた。

河野悦次郎師団長が来廠の時、私は対潜監視教育法の視察を受けた。実物の潜水艦を見たこともなく、教育を受けたこともない私にとっては難問題であったが、湖の中に標旗を立て、方向と距離、魚雷の航跡発見を速やかに報告する程度で三十分間を過したが、視察された参謀にもこれと云う名案もなかったようである。

第十一中隊長東大尉は海没防止訓練を受け、寒中身を刺す様な琵琶湖に飛び込み、酒樽に縄を巻き三、四人で泳ぐとか、竹筏を浮かべて救助作業の演習を実施して好評を受けた。軍旗護衛のためには特に水泳に巧みな者十五名が選抜され、重要書類の防濡訓練も行った。

十二月二十六日に初めて面会が許された。連日雪の中を我が子、我が夫のために面会に来る人が絶えなかったが、軍の秘密保持のため、日曜もなく面会も一切許されず、浅野連隊長は必勝の猛訓練に邁進したが、この一日を開放し面会日と定めたのである。私にも妻が面会に来た

が昼間は多忙で木綿屋旅館に待たせ夜の寸暇を得て駆けつけた。学校を卒業して僅か一カ月。在校中、妻帯者は土曜日の夜から月曜日の朝まで外泊を許されたが、私は勉強に全力を傾注するため妻は留守宅に残した。

この頃大隊本部甲書記西川辰夫曹長（長浜市出身）から結婚許可願いが出された。早速大隊長と相談の上許可することにした。勿論前からの婚約者で出征前に結婚式を挙げたいとの希望であった。娘さんも時々廠舎に来てひそかに西川曹長と会っておったが私は見て見ぬふりをしていた。

西川曹長には殊更に公用外出を許可して楽しい二人の会う瀬の機会を与えた。

ところがこれが浅野連隊長の耳に入り、ある日、私は呼び出された。軍人が戦場に向うに当って家庭を複雑にする様な処置は適当ではない。今後は充分注意をする様にと叱られた。

西川曹長は北ビルマに進駐して間もなく、サーモ附近で悪性マラリヤに侵され担架で後送される時、

「副官殿申訳ありません、一日も早く元気になって帰って来ますから」

と別れたが、これが最後で再び会うことはなかった。剣道二段の腕前で頑健な彼も、ビルマの悪性マラリヤには勝てなかった。即ち昭和十九年八月四日ホピン第二野戦病院の片隅で新妻の姿を夢に浮かべて不帰の客となった。

私は始めて浅野連隊長の教訓がしみじみ理解できた思いであった。

十二月二十八日から二日間、私は密林内の戦闘専修員として京都宇治廠舎の工兵隊に出張して教育を受けることになった。宿舎は鉄眼の一切経で有名な黄檗山万福寺で連隊の先任者は朝日中尉である。特に許可を得て一晩、妻の実家、大阪の天王寺に帰った。

適当な下宿があったら今津町に妻を呼び寄せたかったのだが毎日の激務で探す暇もなく、幸い国鉄職員であった督上等兵が国鉄成瀬自動車区長に頼み、その好意で桜井菓子店の二階の一室を借りることになった。

正月三日間の休暇には故郷の岐阜に帰り両親の墓参、隣家の人々に別れの挨拶廻りをし、引き続いて大阪の妻の実家に挨拶、その夜、妻、母、妹美代子と四人で角座に観劇に行き、中村扇雀の義経千本桜、芸代一代男で久し振りに忙中閑有りの一日を楽しんだ。

三日夕、廠舎に帰り再び訓練に事務に連日の繁務に忙殺された。

十二日妻来津して桜井菓子店に泊る。主人夫婦、お婆さんがとても親切で家族同様のもてなしを受け、私が甘党だと知って、ぜんざい、お餅、お菓子で接待してくれた。だが楽しい生活も僅か二日で終わる。

十三日の夜いつもの如く清水軍医大尉の熱帯地における衛生講話を聴講中、突然師団司令部より電話があり、連隊の主力は十五日廠舎出発、乗船地大阪に集結する様に命令が下った。かねてから予期しておったとは云え、突然のことで狼狽して準備にとりかかる。

下宿に帰って早速主人夫妻に話すとまことに短い因縁であったと、奥様は涙を流して別れを

惜しまれる。砂糖、小豆、菓子を沢山餞別として贈られ、妻は大阪に見送りのために先行した。

十五日午後八時今津駅出発。列車輸送により大阪に向う。

この日、少尉任官の辞令が到着。少尉の正装に身を正して故国を出発し得ることは、せめてもの妻への贈物である。翌十六日夜半一時、大阪浪花駅に到着して港区富屋旅館に投宿する。前日の疲れはまだ残っているが、乗船準備で忙しい港内第三突堤に三池丸を視察する。その夜、大阪の父兄、妹静子が来訪するが多忙のため応接の暇もなく、簡単に応接室で対談して別れた。十七日は乗船準備で終日忙しく港の船と旅館（大隊本部）との間を幾回ともなく往復、乗船に関する命令下達連絡等でまさに八面六臂の多忙である。

この日大阪港において前に敦賀連隊の中隊長であった池田尹彦少佐に会う。当時関東軍野戦鉄道参謀であり、私達の連隊は昭南（シンガポール）に行くのだと初めて教えられた。

昼の十一時頃再び母、妻が来訪するが面談の時間がなく、旅館の一室を借りて暫く待ってもらい、五時頃、港より帰館して、首を長くして待つ母、妻に会った。好物の牡丹餅を御馳走に話は尽きず、途中から父が加わり水入らずで故国最後の夜を楽しみ、十時に別れを惜んで床に入った。

十八日早朝七時乗船開始。三池丸船上の人となる。寒風強く膚を射す。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com